

日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと「場所」への都市社会学的接近

広田康生¹

An Urban Sociological Approach to the Study of Japanese Grassroots Transnationalism and Its Place

HIROTA, Yasuo

要旨：本論で筆者は、「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」研究が、移動にかかわるさまざまな「生の物語」が展開する「都市的世界」の認識と、都市社会学的研究領域の一つとして、「閉塞的なナショナリズム」とは一線を画する「多様性と統合」「アイデンティティと場所」を探求するテーマ領域であることを確認し、研究の指針と構成を示す。

上記の課題を実現するため本稿では、都市コミュニティ論特に奥田都市コミュニティ論が都市社会学に提起した課題としての秩序研究から「下からの都市論」構想——「民族・エスニシティ、階級・階層、ライフスタイル、宗教・文化その他の系統の差異性を伴い相互に複雑にばらつき」ながら、「意味創造的側面」を発揮する都市の研究——に至る研究道程を追いながら、筆者らの都市エスニシティ論はそれをどのように受け止め、トランスナショナリズム論とどのように接合したかを振り返り、その課題を展開する一つの試みとしての「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」研究の意味を明らかにする。

キーワード：都市的世界、生の物語、グラスルーツ・トランスナショナリズム、アイデンティティと場所

1. 本論の意図

本稿は、「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」研究の目的と意味および方向性を、都市社会学特に都市コミュニティ論の提起した課題と接続させつつ明らかにする。

まず初めに筆者は、「移民」「移住者」「越境者」研究の多様な含意についての注目が1990年代後半から急速に拡大していることを再認識しなければならない(Forner, Rumbaut, and Gold 1999; Hirschman, Kasinitz, and Dewind 1999)¹。「移民」や「越境者」を見る現在の視線には、グローバル化を背景に、移動と定住が国境を越えて作り出す「回路的世界」の意味や、クレオール性、ディアスポラ性に象徴されるような現代社会の差異と共存の錯綜する関係性や、そうした状況のなかでの「生の物語」の探求、また、トランスナショナリズムの展開のなかでの新たな「境界領域」の出現を含んだ「都市的世界」の様相や、日常的な秩序レベルでの「多様性と統合」やナショナリズムの台頭に関する多様な関心も含まれている。そのなかでトランスナショナリズム論は、上記の意味で

の現在的な越境移動と場所研究の枠組みの一つであり都市的世界研究の一つでもある。本論で使用する「グラスルーツ・トランスナショナリズム」とは、そうした日常のレベルで普通の人々によって展開されるトランスナショナリズム過程を強調したものである。一方、日本人のグラスルーツなトランスナショナリズム過程も、移動の磁場を繋ぐ「回路的世界」の形成とともに、いくつもの「生の物語」やアイデンティティと場所に関する物語を紡ぎ出してきた。それは、都市社会学特に都市コミュニティ論と都市エスニシティ論が追究する都市的世界に関する研究課題と接続する。

そこで本論では、まず、都市社会学特に都市コミュニティ論、そして都市エスニシティ論が提起した研究課題について再検討し、ここで提起された課題や問題意識とトランスナショナリズム論の思想的背景や立ち位置、具体的な研究枠組みを重ね合わせて検討することで、「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」のテーマの意味と研究方法、構成について考えていく。

2. 都市コミュニティ論の問題提起と都市エスニシティ論

2.1 奥田都市コミュニティ論の問題構成と提起した課題——「下からの都市論」という課題提示への道程

現代の「越境者」および「移民」と彼らが作る「回路的世界」が提起する問題を、都市論・都市コミュニティ

受稿日2011年11月12日 受理日2011年12月16日

*本研究は、文部科学省科学研究費「基盤研究(C)」[日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所](課題番号: 22530569:平成22-24年)の助成を受けている。

1 専修大学人間科学部社会学科 (Department of Sociology, Senshu University)

論の問題意識と接続したのは奥田道大である。

奥田道大が都市コミュニティ論の創始者の一人であることは周知のとおりである。もともと奥田の都市コミュニティ論は、1960-70年代の国土再開発と東京への人口集中が生み出す郊外の生活問題をきっかけにして、これまでの地域共同体的秩序とは異なる、新たな住民秩序の展開を促すという現実的、学問的要請を背景に展開した。奥田の初期の主著『都市コミュニティの理論』の冒頭には次の言葉がある。「社会的には、60年代を画期とする、社会構造の基底を支えていた既成秩序（自然村的秩序、共同体的秩序）の解体にともない、この既成秩序に接続して、あるいは代わって新しい秩序モデルの創造・再発見が主要テーマ化する」（奥田 1983: iii）。

奥田の都市コミュニティ論は、その後、「大都市郊外の新住民の先端的なコミュニティ形成に傾斜している」（奥田 2004: 171）との批判を受けることになるが、実際には1970年代当初から住民運動過程でのコミュニティと地域共同体との結びあいや、「運動過程を通じて視界に入ってくる来住層—地付層を交差する形での人と人、人と組織、組織と組織との結びあひ」といった異質・多様ということとを奥田都市コミュニティ論の核心的テーマとして顕在化させていた（奥田 2004: 172）。奥田の「様々な意味での異質・多様性を認め合って、相互に折り合いながらともに自覚的、意思的に築く洗練された新しい共同生活の規範、様式」という「コミュニティの旧定義（傍点筆者）」（奥田 2009: 23）は、まさにそうした都市コミュニティの研究の象徴的な表現であった。

奥田の都市コミュニティ論はその後、地方都市、そして関西大都市圏の近郊地の丸山、真野のまちづくりの事例等を経由して、1980年代には、「大都市衰退地区の再生」という現実テーマのもとで、大都市インナーシティをフィールドとしてリアリティを問うことになる。奥田の言葉によれば、その理由は「東京都心のCBDの自己運動化が『世界都市』化と結んで高揚期に突入したときに、地域社会レベルではまさに『コミュニティの放棄化状態』にあった」からである（奥田 2004: 181）。奥田は、こうした東京都心部で、小学校の統廃合問題等のコミュニティの現実問題と格闘しながら、都市社会学的論点として「共同性と個」をめぐる古くて新しいテーマに取り組む²⁾。奥田によればこの時点で、住民が新しい共同性に求めた座標軸としての「異質・多様性を柔軟かく内包する『都市的』」のテーマが、都市コミュニティのテーマとして再検されてくることになる（奥田 2004: 183-184）。

ただし、その後のグローバル化の展開のなかで、奥田本人の指摘のように、奥田都市コミュニティ論のクリティカル・ポイントとして、異質・多様の都市コミュニティの定義のリアリティをどこに求めるかの課題の緊急性が増していく（奥田 2004: 186）。すなわちここで奥田都市コミュニティ論は、世界都市とグローバル化の進展に拮抗しつつ、「異質・多様な人と人との結びあひに照準した都市像」をいかに構想するかの課題を都市社会学全体に呈示しつつ、それを実現するフィールドを探索する道を歩み出す。

この課題、すなわち「異質・多様性を柔軟かく内包する『都市的』とは何か」という研究テーマに取り組むきっかけになり、考察のための現実的素材を提供したのが、インナーシティに出現したニューカマーとしてのアジア系外国人の存在であった。奥田都市コミュニティ論は、ここで、その後都市コミュニティの「磁場」として描かれることになる「大都市インナーシティ」を現実のフィールドとして、「人と人との緩やかな絆、結びあひの形を異質・多様性にむけての都市的というキーワードで括り」つつ（奥田 2004: 187）、都市コミュニティ論からの「都市論」を模索することになる。ただし、ここでは再びより強く、「日本社会、日本人の日本型システムの基底を支えていた地域共同体と、日本型システムへの内在的批判を契機としたコミュニティとの異同性が現実問題として再提起」された。そして奥田によれば、ここで都市コミュニティ論は、「より大きな都市コミュニティの枠組み」を構想する段階に入った（奥田 2004: 195）。

ところでその構想を進めるうえでの一つの示唆を与えたのは、アメリカ大都市衰退地区における「エスニシティズ・タウン」である。それは、大都市における伝統型ムラとしてのエスニック・コミュニティというよりは、「民族・エスニシティ、階級・階層、ライフスタイル、宗教・文化その他の系統の差異性を伴いながら、相互に複雑にばらつき」（奥田 2004: 202）を示しているが、意味創造的側面も持つ場である。奥田は、こうした社会的多様性をもつ都市もしくは都市的世界を、「錯綜都市・グラスルーツ版」と呼んだ（奥田 2004）。

奥田都市コミュニティ論の新定義「さまざまな意味での異質・多様性を内包した都市的な場であって、人びとが共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして、結びあう生成の居住世界」は、上記の文脈において「コミュニティとエスニシティ」のテーマを軸に構想されたものであり、ここでは差異に関する関心がより全面

に押し出されてくることになる。

旧定義に比べて新定義に含意されたのはどのような現実認識・研究課題だったか。筆者はそれを、「生き方の規範というよりも、生き方の知恵、戦略として、微妙な距離感と境界を内在させながらも、住み合う実態」(傍点筆者) への一層の注目であり、それが奥田の言う「下からの都市論」あるいは、「下からの大都市理解のキイ・コンセプトとしての都市コミュニティの発想と枠組み」(奥田 2009: 83-85) での中心軸になったと考える。「都市共生の作法に代わって、『都市共在感覚』のキーワードを当てた」(奥田 2009: 89) のはその課題を新たな次元で呈示したかったためであると筆者は考える。奥田のこの発想には、「下からのトランスナショナリズム論」からの示唆が明確である³⁾。

奥田都市コミュニティ論が都市社会学に提起した「下からの都市論」という課題やそこに含まれる多様な含意や問題意識をどのように受け止めるべきか。

その後奥田都市コミュニティ論は、上記の都市を描く方法論の探求に向けてエスノグラフィックな方法論の再検討＝エスノグラフィ編集にエネルギーを傾注していくが(奥田 2002: 2004)、この指摘は、その方法論の問題とともに現在の都市社会学に提起された課題として認識しなければならない。

2.2 都市エスニシティ論における受け止め ——奥田都市コミュニティ論の提起した課題をめぐって

奥田都市コミュニティ論と都市エスニシティ研究との接続について筆者は前述のように認識しているが、本論の主眼である「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」のテーマを背景に置いたとき、筆者にとっては都市エスニシティ論の側からこれをどのように受け止めたのか、を問い直しておきたい。

都市エスニシティ論とは、1990年前後を画期にして、日本の都市社会学の中に現れた、外国人労働者と彼らを地域で受け止めた人々が織り成す世界についての研究営為を指す。ただし、都市社会学のエスニシティ研究に取り組んだ、あるいはかかわりを持った、それぞれの研究者の関心や視点、立場はさまざまであった。例えば前述のように早い段階からこの問題に取り組んだ奥田道大や田嶋淳子の場合、都市コミュニティ論に内在する異質・多様性や「個と共同性」テーマに新たなリアリティをもたらすものとして都市エスニシティを取り上げたが(奥田・田嶋 1991, 1993)、田嶋はその後、移動・移住の社

会学と言うべき方向を開拓していった(田嶋 1998, 2000, 2010)。一方、町村敬志の場合のように、人々を「国境」を越えた移動に駆り立てる世界的なレベルでの政治的経済的要因と「グローバルコントロール機能」の集積としての「世界都市」の役割を明らかにするための手掛かりの一つとして移住労働者研究に取り組んだ場合もあった(町村 1994)。さらに、「複合民族コミュニティ」の形成可能性を問うという研究目的のもと、「エスニシティ」を生活構造の一部としてもつ人々の集団結合と分離の過程に焦点を合わせた谷富夫の場合(谷 2002)、あるいはまた、さまざまなマイノリティの持つ人間的、社会的な意味に焦点を合わせつつ現代社会の階層構造の変化を究明する一つ的手段としてエスニシティ問題を取り上げた青木秀男の研究もある(青木 2001)⁴⁾。

筆者の場合は、人々の越境移動が作り出す境界領域の中でさまざまなリスクや障壁を背負いつつ、自らの生活を実現するその「生き方」や日常の実践とそれを支える異質性認識と共同性に関心をもって都市エスニシティ研究を始めたが(広田 1997, 2003b)、筆者自身の都市エスニシティ論は、前述の都市コミュニティ論の提起した課題をどのように受け止めてきたのか。

筆者の都市エスニシティ論は、奥田・田嶋の外国人住民調査とは別の問題意識およびきっかけから始まった。筆者の都市エスニシティ論の特徴は、国境を越えて移動してくる「個人」としての彼らの「生」の現実や「状況乗り越えの実践」に関心があった。「国境を越える人々」「越境者」「越境者－エスニシティ」という言葉を使って彼らの存在を表現したのは、受け入れ国の中での外国人労働者という政治経済的な構造上の位置づけからは見えてこない、越境空間の中での彼らの実践や「生」の意味を捉えようとする意図があった(広田 1997, 2003b, 2008)。

筆者は、国境を越える移動者たちが、送り出し社会と受入社会との移動の「係留点」あるいは「結節点」となる「場所」——それは必ずしも見た目には都市的であるとは限らず、ある場合には先住者のコミュニティがすでに埋め込まれている地域であったり、行政が外国人労働力の受入に積極的に動いた地域であったりした——に作られた社会的世界に発生するさまざまな問題、例えば、いわゆる外国人労働者と呼ばれた人々や子どもたちの適応の問題やアイデンティティ変容の問題、否定的状況を乗り越えていくときの実践の仕方等々に照準し、そのプロセスの意味を考察しようとした⁵⁾。ここでの彼らの実践を一言で表現するならば、それは、国際移動の「係留点」

となる地域に、「越境者」としての彼らが作り出した「日常のはざま」の中で、受け入れ地域の側の人々との相互の「異質性認識」を前提にしながら、日常を乗り越えていく「生き方」や「生の物語」であった。都市社会学的に言うならそれは、都市コミュニティの新たな位相と「場所」の意味を再発見するという含意があり、都市コミュニティ論の提起した課題のなかでは、「微妙な距離感と差異」の内実に接近したものであり、係留点における彼らの日常実践の中に「意味創造の場」を発見しようとする試みであり、その試みを、エスニック・ネットワークをとおした「回路的世界」の発見に求めたことになる。筆者は考えている（広田 1997, 2003b, 2008）。

筆者からするなら、「民族・エスニシティ、階級・階層、ライフスタイル、宗教・文化その他の系統の差異性を伴い、相互に複雑にばらつき」ながらしかし、「意味創造的側面」を持つ「下からの都市論」——こうした表現は（奥田 2009）の中で初めて出てくる——は、「場所」と「場所」あるいは移動の「磁場」のつらなりのなかで出現する境界性を帯びた都市的世界に注目することで、また、奥田都市コミュニティ論の初期のテーマとしての「秩序問題」は、グローバル化による空間の画一的な編成が進行するなかで逆に強くなるナショナリズム論とは異なる「多様性と統合」という問題設定のなかで一部は考察されうると考えてきた。

奥田の指摘する「微妙な距離感と差異」「意味創造の場」という問題は、都市エスニシティ論にとっては国際移動の「繋留点」に生成する「日常のはざま」の中に見ることができた。すなわち、「越境する人々」は、当然のことながら受け入れ社会の中に、従来の制度化された世界とは必ずしも合致しない価値や新たな制度を持ち込む。持ち込まれた側は、そこに、既存の日常的な制度の「裂け目」や「はざま」に気づかざるを得ない。この「はざま」におきる問題については、既存社会の構造から見られる社会的地位や制度化された価値や、ルーティン化された行動スタイルに依拠した人間結合だけでは対処できない。そこを生きる個人の「実践」のあり方や「自己実現の仕方」「生き方」そのものが問い直される。3で詳述するが、それはまさに「境界領域」あるいは「越境領域」の出現であり、こうした「越境性」「境界性」を含む世界の研究において、現在の「構造」に規定される個人という側面だけではなく、それを乗り越える努力をせざるを得ない個と、個の繋がりの可能性が注目される。筆者は、その行為を描く概念として「日常実践」という言葉を使った。そしてこうした「越境領域」は、人の移動とともに、人と人とのつながり——筆者はそれをエスニック・ネットワークという概念で表した——をとおして「場所」と「場所」とをつなぐ「回路的世界」を形成する（広田 2008）。

もちろん、奥田都市コミュニティ論が提起したものは、「解」ではなく問題意識、課題、そして方向性でありその示唆する広がりや奥行きは深い。だが筆者は、その中から、特に「異質・多様の人々の生き方の知恵や戦略」「微妙な距離感と境界」の内実をより詳細に検討すること、そして「生のアクチュアリティ」そのものを、「都市的世界」移動の結節点における「アイデンティティと場所」の研究としてその具体像を描いて行く基盤ができたと考える。

筆者は、こうした問題の制度的解決を目指す流れのなかで、あるいは、現実の集住地域における「共生」をめぐる問題状況への新たな施策の展開のなかで、そして構造論的研究の展開のなかで改めて上記のような都市社会学的エスニシティ研究が提起した「境界領域」における個人の「日常実践」や「場所」「コミュニティ」のもつ意味を再認識することが重要であると考え⁶⁾。

では、都市コミュニティ論が提起した課題を前述のような研究課題として受け止めるとき、具体的にはそれをどのような現実的研究作業として展開を図ることができるだろうか。筆者は、その一つの方向性として下記の諸点が重要であると考え。

第1に、「微妙な距離感と差異」、日常実践の展開、新たなアイデンティティ形成、かかわり（incorporation）の諸過程が発生する拠点としての「場所」＝移動の「磁場」の存在の意味をどう認識し、それをいかに「都市的世界論」として位置づけなおすか、という問題が挙げられる。ここにおいて都市エスニシティ論が提起した課題とトランスナショナリズム論が交錯することになる。

第2に、「微妙な距離感と差異」、日常実践の展開、新たなアイデンティティ形成、かかわり（incorporation）の諸過程が発生する拠点としての「場所」＝移動の「磁場」の存在の意味をどう認識し、それをいかに「都市的世界論」として位置づけなおすか、という問題が挙げられる。ここにおいて都市エスニシティ論が提起した課題とトランスナショナリズム論が交錯することになる。

第2に、現在の人々の移動を背景にしたとき、「都市的世界」の問題は、国家レベルでの「統合」やナショナリズムとは異なる、グラスルーツなレベルでの日常的秩序形成という課題を呈示してくる。「都市コミュニティ論に内在した規範意識」から「生き方の知恵、戦略として、微妙な距離感と境界を内在させながらも、住み合う実態」が生み出す日常的秩序の問題をどのように、移動の磁場での「人々の生のアクチュアリティ」として表現しうるか、また、そうした研究の志向性を都市社会学的には、初期シカゴ学派の規範的側面を持つ都市コミュニ

ティ概念の乗り越えの課題として詰めておく必要がある⁷⁾。

第3に、奥田の言う「共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして、結びあう生成の居住世界としての都市的世界」は、その裏面に「共在のポリティクス」とでも言うべき問題を提起せざるを得ないと考える。ただし、この問題については、トランスナショナルな「場所」におけるアイデンティティ形成と共生の問題として再構成をせざるを得ないと筆者は考える。

これらの課題を念頭に置きながら「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」研究の意味世界をより詳しく検討していきたい。

3. トランスナショナリズム論と「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム」——場所と越境性・境界性の現在の意味——

3.1 トランスナショナリズム論とその思想的背景——グローバルゼーション論との連続と差異

これまで筆者は、断片的ながらトランスナショナリズム論について再三触れてきた(広田 2002, 2003a, 2003b, 2005, 2006a, 2006b, 2010a, 2010b, 2010c)。重複するが、都市コミュニティ論が提起した課題と「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」研究とを繋ぐために、トランスナショナリズム論について改めてその問題提起を整理しておく必要がある。

S・ヴァトヴェック(S. Vertovec)はその著書 *Transnationalism* の冒頭部分で、トランスナショナリズムについて、国家政府間で提携される正式な条約や外交関係、ある国から他国への旅行や貿易といった国際的な関係と区別し、「非政府的行為者間の国境を越えたビジネスや非政府組織や個人の間結びつきや相互のやり取りが(宗教的信念や共通の文化的、地理的出身に基づいて)続いているとき、我々はこれをトランスナショナルな実践とか集団として区別する」と述べている(Vertovec 2009: 3)。

ヴァトヴェックのこの説明は抽象的だが、ただヴァトヴェックが同書においてトランスナショナリズム研究の豊かな研究蓄積は「移民トランスナショナリズム(migrant transnationalism)にあると指摘している点は注目される。それは、文化人類学者であり社会学者であるS.マーラーが、トランスナショナリズム論の主流は「マイグレーション研究としてのトランスナショナリズム(transnationalism as transmigration)」にあると述べていることとも呼応する(Mahler 1998)。これらの指摘は本

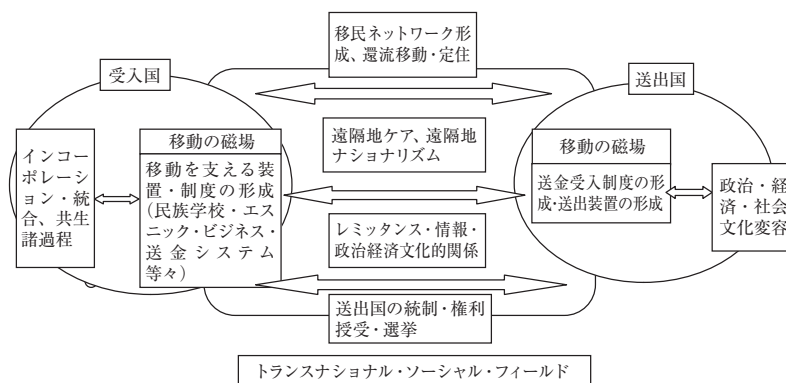
論では特に重要である。

「移民トランスナショナリズム」の嚆矢、原点とも言うべきN・グリック・シラー(Nina Glick Schiller)はその著書 *Nations Unbound* の冒頭部分で次のように定義している。「我々は“トランスナショナリズム”を、移民がその出身地(origin)と定住地(settlement)の社会を連結する、複雑に縺りあわされた社会関係を育みそして維持する諸過程と定義する。我々は、こうした諸過程をトランスナショナリズムと呼ぶことによって、今日の多数の移民が、地理的、文化的、政治的な境界を跨いで形成する社会的な領域の存在を強調したい。そして多様な関係——家族的、経済的、社会的、組織間のそして宗教的、政治的な関係——を発展させ維持する移民たちを“トランスマイグランド”と呼ぶ」(Basch, Schiller, and Szanton Blanc 1994: 7)。さらに付け加えれば、「地理的、文化的、政治的な境界を跨いで形成する社会的な領域」はトランスナショナル・ソーシャル・スペース(T.S.S)ないしはトランスナショナル・ソーシャル・フィールド(T.S.F)と称した。

この出身地と目的の定住地となる場所で、あるいはその二つを結ぶT.S.Fにおいては、具体的にどのようなことが起きると想定されているのだろうか。P・レビット(P. Levitt)は、1960年代後半以降、ボストンのジャマイカン・プレーンとドミニカのミラフローレスとの間に作られる移民のネットワーク世界を次のように表現した。「ミラフローレスの村人たちは、しばしばマサチューセッツの企業の名前入りのTシャツを着ているが彼らはそれにプリントされている言葉の意味さえ知らない……ミラフローレスの公園のベンチの多くは、その昔ボストンに移住した村人たちの名前が刻まれている。そしてほとんどすべてのミラフローレスの人々は……ボストンのジャマイカン・プレーンのドミニカ人コミュニティの溜まり場であるラ・ムザールやラ・セントルについて語るができる。ボストンにおいて彼らは、それぞれの新たな環境が許すかぎり移住する前の生活を再現している……それは、このコミュニティの誰かがいつもボストンとミラフローレスとを行き来している証拠であるし、常にここで情報やものやニュースがやり取りされている証拠でもある」(Levitt 2001: 2-3; 広田 2006c)。

T.S.Fは、送り出しコミュニティと受け入れコミュニティを結んで、国境を越えて形成される空間であるが、その一つの極＝「移動の磁場」である受け入れ社会のコミュニティには、還流移動もしくは定住する人々によっ

図1 マイグラント・トランスナショナリズム過程と T.S.F イメージ図



(筆者作成)

て、彼ら自身が生活をするための就労斡旋機関、就労機会、多様なエスニック・ビジネス、エスニック・スクール、日常生活施設等々ができ上がり、マルチエスニック・ネットワークが形成される。このネットワークは送り出し国側のコミュニティとの間に移民ネットワークを作り出し、送り出しコミュニティとの間に、経済的、文化的な仕送り (remittance) がやり取りされ——この仕送りは、ときに送り出し国の財政に大きな影響を及ぼすことがある——、受け入れコミュニティに居ながら、送り出し国コミュニティの政治への介入が起きることも稀ではない。送り出し国コミュニティに定住する人々は、受け入れ社会とのこうした関係の中で居ながらにして、移動者と同じ価値や生活スタイルを持つ社会過程が展開する (図1)。

注目すべきは、M.ヴィヴィオルカが述べるように、この「場所」=「移動の磁場」ないしは「磁場と磁場を繋ぐ空間」では、送り出しコミュニティでもなければ受け入れコミュニティでもない世界が出現するとトランスナショナリズム論では想定していることである。それは言葉を換えれば越境移動の時代における境界性の再発見と「アイデンティティと場所」研究の再呈示であり、ここでは、国民国家の枠内で当然とされてきたさまざまな制度の見直しが要請されると同時に、生き方そのものが問われる。だが無論 T.S.F は国民国家の制度と対立するというよりは、既存の国家体制の周囲に、あるいは隙間を縫って成立するもう一つの公共圏 (public sphere) であると認識されている。

無論、この「場所」は自立した、閉じた世界ではなく、送出国との間で実質的、精神的な繋がりをもつとともに、特に受け入れ社会からの人種的、民族的、エスニシティ的な「差異」や「異質性」の同化や「統合」やナショナリズムの圧力にもさらされる。それは、多様なア

イデンティティの交渉や承認や排除が行われる過程=多文化主義の展開過程でもあり、国民国家にとっては、「差異」や多様性と「統合」との調整をどう図るかという課題が出現する空間である。市民的ナショナリズムと人種的ナショナリティとの相克や、改めて「共生」の意味が問い直される (広田 2010d, 2011)。

上記の世界を想定するにはある種の知的冒険が必要になる。レビットは、トランスナショナリズム論と言える研究——レビットはトランスナショナル・スタディーズと呼んでいる——は、5つの知的基盤 (intellectual foundations) によって構成される、と述べている。①経験的トランスナショナリズム (empirical transnationalism)、②方法論的トランスナショナリズム (methodological transnationalism)、③理論的トランスナショナリズム (theoretical transnationalism)、④哲学的トランスナショナリズム (philosophical transnationalism)、⑤公共的トランスナショナリズム (public transnationalism)、の5つである。その内、レビットは、⑤を純粋な研究そのものからは切り離しているの、上記の4つの知的基盤について簡単に説明しておく。

①経験的トランスナショナリズムとは、レビットによれば、新しい、もしくは潜在的にトランスナショナルな現象や動態と思われるものを記述し、地図化し、分類して量化しようとする研究の志向性である。レビットによれば、ここで記述されるトランスナショナルな過程とは、一般的には局所的、地域的、国民国家的そしてグローバル・システムに対応した単位での行為者、構造および諸過程から派生したもの、もしくはそれと対比される現象や社会過程を指す。トランスナショナル・スタディーズは、こうした現象を、比較史やエスノグラフィックな戦略を用いてその類似性や差異、関係性、相互作用

についての研究営為である。②方法論的トランスナショナリズム論とは、境界を持つ単位に基礎を置いて収集された既存のデータや証拠、そして歴史的でエスノグラフィックな説明について、本来のトランスナショナルな形や過程が現れるような仕方で、再構成したり再分類したりする研究営為を指す。無論こうした研究営為には、新しいタイプのデータや証拠や、より正確で厳密にトランスナショナルな現実を観察するための調査デザインや方法論を作り出す必要がある、とレビットは指摘する。③理論的トランスナショナリズムとは、既存の理論的枠組や説明に重複したり補足したり、あるいは統合されるかもしれない説明や解釈を公式化、明確化する研究営為である。レビットによれば、トランスナショナル・スタディーズが生み出す理論が、以前にははっきりしなかった現象や動態を明確化し、説明をすることによって、通念的な理論を補足するかもしれないし、あるいは伝統的な理論よりもうまく真実を明らかにすることができるかもしれない、という。理論的トランスナショナリズムとは同じ現象を別角度から構成し直したり、理論的洗練や読み替えを含む研究作業を指す。最後に、レビットが言う④哲学的トランスナショナリズムとは、社会的世界や生活は、本質的にトランスナショナルなものであるという形而上学的前提から出発するものである。レビットによれば、トランスナショナルな現象や動態は、例外というよりは、それが当然のルールであり、グローバル化の副産物というよりは底流する現実と考える。こうした見方には、認識論的眼鏡や研究方法、理論化そして境界内の存在が埋め込まれそこで構成されるトランスナショナルな動態を明らかにすることを可能にする社会関係の理解が必要になる、という (Levitt and Khagram 2008)。

このトランスナショナリズム過程が描く世界は、グローバリゼーションが描く過程とどう異なるのか。ここでは、トランスナショナリズム論が焦点を当てている人々や世界と、そうした人々や世界が抱え込む歴史的背景や提起する思想的背景に注目しておきたい。筆者は特に、トランスナショナリズム論が対象とする移動者たちが示唆するクレオール性やディアスポラ性、ポストコロニアル理性批判が提起する問題との親近性に注目しておきたい。

もともとグリック・シラーらの研究の原点は、ハイチやグレナダ等のカリブ海諸国をフィールドとして、人の移動と越境する社会を跨いで形成される社会空間、人々の両義的アイデンティティ形成、遠隔地ナショナリズムに関する研究であった。周知のようにハイチやジャマイ

カそしてグレナダなどのアンティル諸島は、16-17世紀以来フランスの植民地となりプランテーション農業が行われた。植民地支配者同士の結婚で生まれた子供たち＝移民二世や三世は、両親と皮膚の色は同じでも実際に育った文化は異なり、両親の母国に愛着や帰属意識を感じれば感じるほど逆にその差異を認識せざるを得ないというアンビバレントな立場に置かれる。植民地主義を批判すれば逆に自らの出自を否定することになるという状況の中で、新たなアイデンティティを模索せざるを得ない。そして、こうした状況は、第二次世界大戦が終了しても、国外県としてそのシステムやそれを正当化する思想や風潮 (ポストコロニアル理性) の中で、その両義的な立場が維持されるという状況にある。グローバル化の進展は、国境を越えて移動と定住を行うグラスルーツな人々のまさにクレオール的なアンビバレントな思想と行動を象徴するものとなる (Chamoiseau 1991=1995; 遠藤 2002)。

トランスナショナリズム論が対象とするこうした移動と定住のグラスルーツな人々のディアスポラ性やクレオール性は、グローバリゼーションを生み出す西欧的近代の落とし子でもある。この立場性が、トランスナショナリズム論がグローバリゼーション批判となる所以でもある。

トランスナショナリズム論が持つ反グローバリゼーションの思想は、M・P・スミスらの「下からのトランスナショナリズム論」に色濃く表されている。スミスは「グローバリゼーション」と「トランスナショナリズム」を明確に区別している。スミスにとって「グローバル化」とは、「特定の国家領域からの脱中心化」「フローの空間化 (space of flow)」を意味し、「トランスナショナル化」ないしは「トランスナショナルな社会関係の形成」は、「一つもしくはそれ以上の国民国家を超えつつ、他方でそこに“つなぎとめられる”関係」の展開を表す (Smith 2001)。

彼らによれば、トランスナショナリズム論の意味世界＝研究世界を一言で表せば、それは、「普通の人々の越境移動」を土台にした「移民のネットワーク」が作り出す「越境する社会空間」の形成という発想とその具体的な過程への関心であり、抽象的なグローバル過程への絶えざる問い直しとその「脱構築」(＝グローバリゼーション論が捨ててきた問題とは何かを問い直すこと) を目指す研究世界であるということになる。ここでは、どの国家もあるいはローカルな地域もグローバル資本によって構造化されて初めて発展するという言説には距離を置

き、階級に還元されない「差異」の構造があることにも注目する。例えばスミスはグローバル対ローカルという「二元論的枠組み (binary framework)」について、それを、グローバル対「閉じたコミュニティ」「抵抗のコミュニティ」という問題に還元する設定は、移民やディアスポラといった越境者たち (border crossers) の増大がもたらす社会文化的、政治的意味に気が付いていないとして、彼らが、地球上の遠く離れたところにある社会的ネットワークを結びつけ、同時存在の状況を作り出すことによって彼らの生活を再組織化している、ことを軽視していると言う (Smith 2001: 111)。実際こうした考え方の背景には、カルチュラル・スタディーズやそれに影響を受けた移民研究とのつながりが見える。これらの研究からは、文化的な混合、アイデンティティの複数性、周縁に位置する人々の境界の乗り越えの仕方、越境する起業家たちによる国境を超えた経済的实践が、資本による上からの支配や統制をかいくぐる、普通の人々の実践が注目されている (Smith and Guarnizo 1999)。

3.2 トランスナショナリズム論の視線と都市社会学の課題との接合

——「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズム研究」に向けて

筆者は2. 2の最後で、都市コミュニティ論からの問題提起を受け止め展開するポイントとして1. 移動の「磁場」の存在の意味をどう認識し、それをいかに「都市的世界論」として位置づけなおすか、2. 国家レベルでの「統合」とは異なる、「都市的世界」におけるグラスルーツなレベルでの日常的秩序形成とは何か、その際の移動の磁場を繋ぐ「都市的世界」とは何か、そこでの生のアクチュアリティをどう描けるか、3. 「共在のポリティクス」をどう描くか、という課題を提示した。

1. 「移動の磁場」をどう認識するか、それを「都市的世界論」として位置づけなおすかという問題は、トランスナショナリズム論の発想を補助線とするとより明確になる。

都市社会学的に言うなら「移動の磁場」とは、「境界性」や「越境性」の出現を許す新たな時代の「遷移」空間でありここに「都市的世界」が揺籃される「場所」である。

もともと都市エスニシティ論で提起した「日常実践」そして「回路的世界」という発想は、特に政治経済学的な構造に抗しつつも個人の主体性に焦点を合わせようとするカルチュラル・スタディーズ的志向性をもつ人

類学者、社会学者、経済学者たちからなるトランスナショナルリズム論 (特に「下からのトランスナショナルリズム論」と親近性をもつことは否定できない (Basch et al., 1994; Smith and Guarnizo, 1999; Levitt, 2001; Levitt and Waters 2002; 広田 2003a, 2003b)。

確かに移動に焦点を合わせたとき、経済学的理論との関連で「場所」を描く方向性を無視することはできない。筆者は別稿においてF・ビーン (Frank Bean) とG・ステーブンス (Gillian Steavens) の論文を引用しつつ、移動の経済学的説明として、「新古典派経済学理論 (New classical Economic Theory)」「移民の新経済理論 (New Economic Theories of Migration)」「世界システム論 (World System Theory)」「ネットワーク理論 (Network Theory)」について簡単にレビューしたことがある (広田 2005)。例えば、ビーンとステーブンスは、近年の主な移動者類型を、「合法的移民 (legal immigrant)」「難民 (refugees)」「非合法移民 (unauthorized migrants)」「移民ビザを持たない短期流入者 (persons admitted for short periods of time on nonimmigrant visa)」に整理し、その重要な特徴として、自発性をあげ、特にヒスパニック移民を対象として分析した⁸⁾。

だが、少なくとも「移動の磁場」の都市的世界性と「生の物語」「アイデンティティと場所」を描くことを考える場合筆者は、上記の経済学的要因の重要性を認めつつも、しかし、第一点として、ポルテスが早い段階で指摘していたように、「移動の磁場」の形成には、社会的、政治的、歴史的な関連性に注目することの重要性に留意したい (Portes 1989)。すなわち「移動を人々の合理的な費用－利得のバランス計算に基づいて起こると考える」立場や「社会経済的な不平等が移動を引き起こす」とする立場、「分節的労働市場」論に一理はあるとしても、第一に、移動は、合理的な費用－利得バランス計算だけではできないし、移動や移民を促す“社会熱”のようなものも影響する。また、移動に関する「物語」の形成や「状況の定義」も問題になる。筆者は、移動を促すこうした側面がぶつかり合う場所を「移動の磁場」と定義したい。そしてここではトランスナショナルな移動の磁場となる「クロスロード」としての「場所」に注目し、それを移動する個人の「生」と実践に関連させ、彼らの形成するコミュニティを描く方法をとりたい。このように設定することで、クロスロードとしての「場所」をつなぐ世界は、まさに「都市的世界」のダイナミズムを表してくる、と考える。一例を述べれば、例えばR.ウエダ (Reed Ueda, 2002) は、“An Early Transnation-

alism? : The Japanese American Second Generation of Hawaii in the Interwar Years”という論文で、「初期トランスナショナリズム」という概念を用いて、第二次世界大戦の前のハワイの日系人移民二世の日系アメリカ人としてのアイデンティティの形成について、母国の日本が関係を閉ざしたなかで、そしてナショナリズムの横行のなかでいかにその二つの母国を架橋するアイデンティティを作り出したかについて分析している。この短い論文は、国民国家の単位に縛りつけられた人々の悲壮な存在という観点からではなく、日本とアメリカを架橋する「場所」においてトランスナショナルなアイデンティティの形成という問題がいかにリアリティを持ったか、という観点から歴史的資料を読み直し、それがクロスロードを繋ぐ世界において可能になったと述べている。

2. 国家レベルでの「統合」とは異なる、「都市的世界」におけるグラスルーツなレベルでの日常的秩序形成とは何か、そこでの生の「生の物語」をどう描けるか、という課題についてもトランスナショナリズム論が一つの補助線になる。

すなわち「下からのトランスナショナリズム」(スミス)過程は、特定の具体的な、越境移動の拠点となる「場所」に、越境する人々と「共振者」の実践による「境界領域」を生み出すことで、背後に形成されている国境を越えるネットワークを想像させると同時に、その「場所」に埋め込まれたさまざまな関係性や複数の結合原理を明るみに出し、その意味を改めて考えさせる契機になる。越境者たちは、就職にしても、学校への就学にしても、保育園への入園に際しても、住宅の借り入れや取得に際しても、あるときには受け入れ地域社会の施設を利用し、あるときには、受け入れ地域社会の中に存在する同郷団体を利用し、あるときには受け入れ地域社会に発生したサポート組織の力を借り、あるときには、異なる民族の力を借りて、そのチャンスを獲得する。その利用の仕方やそのときの人と人とのつながりの世界の形成と広がり、すでに当該の地域に埋め込まれ、そして忘れ去られていた歴史的な結びつきを時間を超えて再生させる。都市エスニシティ論において再三紹介されてきた鶴見U地区の場合、大正から昭和初期にかけて形成された沖繩村を中心とした人間関係や“エスニック・コミュニティ”としてのつながり、差別の構造のみならず、この「場所」が川崎や鶴見の大工場地帯の後背地としての都市的文化や住宅地として開発される可能性を秘めた歴史を埋め込んでいたこと、それに伴うさまざまな人間関係や出来事など、地域に埋め込まれたそうした社

会的なるものすべてを、日系ブラジル人という二重のディアスポラ性を持った人々の出現とともに再生させた(広田 2003b; 藤原 2008)。

彼らの結びつきは、地域の間人関係や情報ネットワークの「結び目」となる施設をとおして、キーパーソンとなる人物を介して、互いに連携する。例えばあるレストランのオーナーが日系ブラジル人を多く抱える学校の教員と連携して「保護者交流会」を組織すると同時に保育園や同郷団体と連携をとって展開していくといった融通無碍な結びつきを生み出す。ちなみにこの繋がり の原理を筆者は、融通無碍という意味でそして従来の構造的な位置づけに必ずしも拘束されていないという意味を込めて「共振」という言葉で表わした。それは、階層や人種や民族性や性別を超えたつながりとして認識され、越境移動する人々と結びつく人々を「共振する人々」という言葉で表すことにつながった。筆者は、そうしたつながりを、「エスニック・ネットワーク」という言葉で表し、ここに、人の繋がりとしての「コミュニティ」という言葉のリアリティを再発見しようとした(広田 2003 b)。

ただ、「境界領域」における「日常の実践」「異質性認識」「共振」を軸にする「コミュニティ」形成のリアリティの探究は、互いの異質性認識のありようや、「都市的世界の可能性」を探るという側面にウエイトを置きつつも、自治体による「共生」概念の平準化や、都市エスニシティ論の「制度化」も相俟って(新原 2006)、「問題解決」と「共存」「協調」にウエイトが移るという経験をした。だがそれは、むしろ統合と編入過程の問題あるいはナショナリズムとの関係という問題を提起しており、それは3の課題となる。

3. 「共在のポリティクス」の課題については、どうか。

この問題は、移動の磁場となる場所における「インコーポレーション」の位相をどのような視点から分析するか、という問題とかわる。

しかしむしろこの研究位相は、日本の都市エスニシティ論においては繰り返し経験的な調査報告がなされてきた分野であり、筆者も同様に断続的ではあるが経験調査を続けている(広田 2006a, 2006c, 2010a, 2010b, 2010c, 2010d)。さらにこの領域は、言うまでもなくアメリカにおける移民研究において最も蓄積が多い領域であり、例えば1920年代初期シカゴ学派的R・パークの同化論に始まり、近年のR・アルバラのインコーポレーション論(同化論、分節的同化論を含む)等の研究が目白

押しである(広田 2005)。

本論では筆者は、まず第一に、トランスナショナリズム論的解釈に示唆を得て、「移民」の存在様式に注目することの必要性を改めて提起しておきたい。ここでは、改めて、古くて新しい問題である「ディアスポラ性」や「クレオール性」の再検討が必要になるかもしれない。

周知のようにR・コーエンは、故国を離れ国際的な移動・移住をする人々を、被害者ディアスポラ、労働ディアスポラ、交易ディアスポラ、文化ディアスポラ等々の類型で表そうとした(Cohen 1997=2001)。また足立伸子は、ディアスポラという概念について、「祖国を離れ、祖国との文化的、情緒的な集団的アイデンティティを維持し続けている人々」とし、それは、「旅」「避難民」「トランスナショナリズム」「移民」といった概念・用語と重複すると述べている(足立 2008: 17)。また、前出のヴィヴィオルカは、移民送出に伴うディアスポラについて、三つの立場性を提起している。一つは、ジェノサイドや大量虐殺、暴力的追放といったことにかかわるもので、パレスチナ人がそれに当たる。第二のディアスポラは出発点が強制と暴力というよりは選択であるような経験に基づいているもので、商人ディアスポラがそれに当たる。そして第三のかたちは、トランスナショナルなコミュニティがその中で作られる生産の論理に対応するもので、ポールギルロイの『ブラックアトランティス』に代表されるような「特殊アフリカ的でも、アメリカ的でも、アンティル的でも、イギリス的でもなく、同時にそれらのいずれでもあるような人々」(Wieviorka, 2001=2009: 50-53)である。T.S.Fにおいては、人々は複数の「場所」や国家と相克する場合もある。特に近年の「移民」の場合、例えば、日本社会に來住した日系ブラジル人のように、二重のディアスポラ性をもつ人々が増加している。彼らは日本人のトランスナショナリズムにおいては祖形ともいべき人々の子孫であり、ルーツと出生地(origin)とのほごまで、双方に帰属するアイデンティティの新たな形を要請される。

この問題は、前述の同化、統合、編入といった問題をめぐる「方法的」再構成の必要性を示唆する。例えばヴィヴィオルカは、移民のアイデンティティについて、ホスト社会への一般的価値と文化への同化を同化の進化主義モデルとして批判しつつ、「同化または統合しているにもかかわらず、社会の他の成員と比べて際立った差異をおびる」という「移民の第二の人間像」の存在について指摘し、この人間像が存在するのは、彼や両親の出身国の伝統から移民が解放されるようになってからであ

り、それは、社会の働きかけと同時に行為者が自らについて行うはたらきかけの結果でもあると述べているが(Wieviorka, 2001=2009: 147-151)、こうした視点も改めて再考される必要がある。

最後にこの分野が内在する理論的、学説史的な問題提起として、初期シカゴ学派のエスニシティ研究の読み直しが必要になるかもしれない。

歴史家のS・パーソンズ(Stow Persons)は、『シカゴ学派のエスニシティ研究(Ethnic Studies at Chicago)』の中で、「アングロアメリカンが背負った重荷」として、アメリカ社会の統合のために、アングロアメリカンが、いかに多様な「人種(race)」を「エスニシティ」として組み込む課題を背負ったかについて論じている。この問題についても別稿においてすでに指摘しているので、本稿では要約するにとどめるが、パーソンズによれば、人種的マイノリティの同化の問題は、すでに1750年代のペンシルバニアへのドイツ移民の大量の流入によって始まり、以来アングロサクソンは、自らを白人として認識しつつも、政治的、文化的支配を継続するために、肌の色への偏見をエスニシティ化することで希釈化し達成しようとしたこと、すなわち、人種的な異質性をエスニックな異質性に変換しようとした過程をアメリカにおける「統合(integration)」の過程であると指摘している(Persons 1987: 3)。

この問題は、いわゆる市民的ナショナリティによる人種的ナショナリティの克服というテーマであるが、パーソンズは、こうした変換の基準としてアメリカ社会が採用した具体的基準が、英語の習得、キリスト教的生活倫理、共和制の支持、そして定住であると指摘する。そして、この課題に回答を与えたのが初期シカゴ学派社会学であったとパーソンズは言う。

パーソンズは次のように指摘する。「シカゴ学派の理論にとって、農村と都市を対比することは、パークにそれを可能にさせたように、人種とエスニック・グループとの区別を無くさせ、エスニシティ概念を黒人と東洋人を含むあらゆる人種集団の差異を覆い隠すために、必須であった。パークにとっては、ヨーロッパからの移民もアメリカの黒人も、彼ら自身の農村出身者としての、あるいは農民としての背景を共有していることは明白だった。それが東欧の農村出身者であろうと南部のプランテーション出身者であろうと、都市のゲットーへの移住は、人々をして複雑な都市文明への文化的イニシエーションとなる。人種はここでは文化的現象であり、エスニシティは、都市環境のなかにおけるマイノリティ集団の

自己意識を表現するものであった」(Persons 1987: 34)。

この問題は、現在の統合の問題においても古くて新しいテーマであるが、トランスナショナルな「下からの都市的世界」という設定においては、むしろアクチュアルな「生」をどう獲得するかという問題の中で議論されるべきと考える。

4. 「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」研究の幾つかの方向性

本稿ではここまで都市社会学特に都市コミュニティ論が提起した課題の一部を引き受けながら、トランスナショナリズム論に示唆をうけつつ、回路的に繋がる都市的世界とその磁場における日本人のトランスナショナリズムの研究を構想しようとしてきた。

本稿の最後に、「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと場所」というテーマ設定において具体的にどのような研究戦略が必要になるかについて可能性を描くことで本論の結論としたい。

第1に筆者は、「移動の磁場」と「都市的世界」像、そこでの人々の生き方を描く試みとして、日本人の初期移民の生き方と、その出身地を介した繋がりや位相を、初期トランスナショナリズム論として読み直しをする試みをしたい。

これには理由がある。筆者の都市エスニシティ論は横浜鶴見潮田から始まった。ここには沖縄出身者のコミュニティがある。ここを磁場として日系ブラジル人のネットワークが出来た。このネットワークを調査する過程で筆者は、次々と移動の磁場となる地域を訪れた。その一つに磁場として有名であるが、この地区で筆者は「沖家室島」出身者の同郷団体の中心的な役割を果たした人とそのご家族に知りあう機会があった。

前述のように日本社会は、明治18年から、官約移民をハワイに送ってきた。第1回の移民は、山口県周防大島からその多くが出ているが、沖家室島はその属島である。沖家室からの移民は明治後期から増え始めるが、彼らは、貧しさのゆえに移民を希望したという定説にもかかわらず、もともと朝鮮、台湾、ハワイに出漁をしていた人々が多く、当時の交通のクロスロードであり「媒介性」「商業的世界」という意味では極めて独特な都市的ネットワーク世界の磁場を構成しており、横浜や東京で青年層に影響を与えた渡米熱の影響や移民会社との繋がりがあった。筆者はその明治後期に移民をしたある人物の子孫に当たるご家族・ご親族にインタビューをした

が、その当時の日記を拝見するにつけ、沖家室という小さな島出身者のトランスナショナルな生き方をハワイ・ホノルルの都市的世界における生き方とレファランスさせ、T.S.Fという「回路的世界」を想定するなかで理解しなければならないと考えた。そうすることで日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと磁場を繋いで形成される都市的世界のもう一つの姿がみえてくるのではないか。当時の移民を「トランスナショナリズム論」的に読み直し、現在にどのように継続しているかを調査、分析することが重要であると考えている。

第2に筆者は、こうした回路的世界を繋ぎとめる装置や施設の問題に関心が行く。例えば、本研究の共同研究者である藤原法子が研究を進めている横浜、神戸、ハワイ・ホノルルの「移民宿」の研究は、越境移動者をとおして都市的世界を描くと同時に、その都市的世界と都市的世界を繋いだ回路的世界を、人々がどう生きたのか、そして回路的世界=T.S.Fをどのように繋いだのかを知る重要な研究になるし、アイデンティティと場所研究の重要な素材となる(藤原 2008, 2011)。藤原によればハワイ・ホノルルの「移民宿」は、ダウンタウンの中心市街地のすぐ外側に隣接する地区——都市社会学的には遷移遅滞とも呼べる街区であるアアラ街と、とダウンタウンの南側に隣接する多民族集住地区カカアコ地区にあった。回路的世界を支える装置から見た、「都市的世界」の可能性とは何かが、問われる。

この問題は、初期シカゴ学派が移民コミュニティの研究をしてきた遷移地帯における移民の生き方の、微妙な距離感と差異、都市的世界の体験と利用の仕方、生き方「編入」や統合の問題にもかかわるテーマである。なお、前述の沖家室からのある移動者も前述のカカアコ地区に多く住み、その後、まもなく、ダウンタウンの北側の街区アアラ街に会社をもち、現在でもその会社は場所を移して代々続いている(別稿を用意している)。

第3に、前述の沖家室からハワイに「出移民」し「回路的世界」の中で生きた日本人トランスマイグラントに対照させて、逆に現在、日本社会に帰還した日系ブラジル人の「編入」とアイデンティティ形成の問題を「日本人のトランスナショナリズム」研究のテーマの中で改めて提起したい。

この研究領域については日本の都市エスニシティ論の蓄積が多いところではあるが、本稿での立場からするならば、彼らは、「場所を移した」二重のディアスポラ性を抱えた移動者の日本社会への統合・編入の問題になる。

彼らは、ルーツとしての日本社会に、出生地のブラジ

ルから“帰還”した存在である。彼らを日本社会にきた外国人労働者という「方法論的ナショナリズム」に一步距離をおいて、トランスナショナルな「都市的世界」における“二重のディアスポラ性”を持った人々として見ることで、彼らの日本社会へのかかわりの過程(incorporation 過程)や、ルーツと出生地についての独特の位置づけ、新しいアイデンティティ形成、「場所の政治」の諸過程を見て行くことにある。それは、「場所を置き換えた」日本人のトランスナショナリズムとナショナリズムとの相克をグラスルーツなレベルで見るもう一つの側面の研究になる。

例えばここでは、ハワイ・ホノルルに移った移民の第三世代や第四世代と相互レファランスさせ、一種の「移民の第二人格論」も調査研究の一つのポイントになる。例えば、完全にその社会に参入していても、差異感はないのか。もしないとするなら、それは、場所の多文化性や同質性とどのように関連するのか、が問題になる。二つの場所を相互レファランスさせることで、「共生」のポリティクスもしくは「場所の政治」の姿が見えてくるのではないか。

そして最後に第四点としてこうした諸論点から、具体的に、T.S.Fである「回路的世界」を繋ぐいくつかの「場所」において、規範意識というよりは「生」のアクチュアリティに注目した「多様性と統合」の実態と方向性について問題にしたい。国家による上からの統合と、下からの都市的世界における統合ないしは、「共在」がどのようなポリティクスを生み出すか、が問題になる。

以上の事例研究を筆者は、都市コミュニティ論が提起し、都市エスニシティ論が受け止めた課題への「解」への試みの一つとして提示したい。

注

- 1) この事情についてはすでに筆者も何度も指摘してきた。例えば広田康生, 2006b, 「テーマ別研究動向(移民研究)」『社会学評論』57(3)参照。
- 2) この当時筆者も、コミュニティの放棄化状況の背後に人々がネットワークコミュニティの拠点としての住み方を東京都心部に密かに作り出していることを調査したことがある。広田康生, 1992, 「変貌する都心空間と伝統的居住者層のライフスタイル」『専修人文論集』No.49を参照していただきたい。
- 3) この研究課題が明確に意識され出すのは、渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編著, 2003, 『都市的世界/コミュニティ/エスニシティ』(明石書店)の編集を一つのきっかけにしている。
- 4) このあたりの事情については、拙稿, 2002, 「都市エス

ニシティ論再考」『日本都市社会学学会年報』20にまとめられている。

- 5) 特に移民の子どもたちに関する調査研究については(藤原 2008)を参照。
- 6) 奥田道大と広田康生の都市エスニシティ論へ評論や批判については、中筋直哉, 2005, 「分野別研究動向」『社会学評論』Vol. 56, No.1.; 樋口直人, 2010, 「都市エスニシティ研究の再構築に向けて——都市社会学は何を見ないできたのか」『年報社会学論集』第23号(関東社会学会)等々がある。
- 7) この問題について筆者は、広田康生, 2011, 「『共生』論と初期シカゴ学派エスニシティ研究」『専修人間科学論集』Vol. 1, No.2で触れている。
- 8) 詳しくは拙稿(広田 2005)参照。ちなみに、移動に関する「新古典派経済学理論」とは、移動をマクロレベルでの労働供給国と労働需要国とのアンバランスから生じると考える立場で、その立場によれば、移動は人々の合理的な費用-利得のバランス計算に基づいて起こると考える。「移民の新経済理論」とは、移動の変数として家族ないしは世帯変数(Family or Household Variable)を導入した理論立場で、低所得だけが移動を引き起こすのではなく、社会経済的な不平等が移動を引き起こすのであり、特に、そうした状況に対するために、そのメンバーを目的地に送り込む家族ないしは世帯の役割がここでは重視される。移動の「分節的労働市場論」とは、社会の階層化がいかに移動に影響を与えるかに焦点を当てる立場で、主要産業部門(primary sector)と二次的部門(secondary sector)のあいだが、動かしがたい障壁によって分断され上昇移動が制限されているとき、二次的部門からの労働者による移動が行われると考える。無論、ここでの第二次的というカテゴリーには、ジェンダーやエスニシティによる階層化の問題も含まれる。移動の「世界システム論」的説明とは、移動は、移動にかかわる諸国、地域、都市のあいだの関係に規定されるとするもので、中枢国(core country)と周辺国の労働力や資源をめぐる搾取関係に焦点を当てる。最後の「ネットワーク理論」とは、ミクロレベルの要因に焦点を当てるもので、移動を決定づける上でいかに行為者間の関係性が影響を与えるかを重要視する。もちろんこの立場においても基本的には、送り出し国と受け入れ国とのあいだの労働市場の差が、移動におけるプッシュとプルを要因を作り出すと考えることは確かなのだが、しかし、そうしたプッシュとプルを要因は、移動が頻繁に起きるにしたがって、その影響力が減退する。それに代わって、出身国のコミュニティとの多様な紐帯の蓄積が移動の継続を促すとする(Beane and Stevens 2003; 広田 2005)。

文献

- 足立伸子, 2008, 『ジャパニーズ・ディアスポラ』新泉社
青木秀男, 2001, 『現代日本の都市下層——寄せ場と野宿者

- と外国人労働者』明石書店
- Basch, L. G., Schiller, N. G., and Szanton Blanc, C., 1994, *Nations Unbound*, Gordon and Breach Science Publishers.
- Bean, F. and Stevens G., *American's New Comers and the Dynamics of Diversity*, Russell Sage Foundation.
- Chamoiseau, P., 1991, *Lettle Cleole*, Hatier (=西谷修訳, 1995,『クレオールとは何か』平凡社)
- Cohen, R., 1997, *Global Diaspora*, UCL press (=2001, R・コーエン著, 駒井洋監訳, 角谷多佳子訳『グローバル・ディアスポラ』明石書店)
- 遠藤泰生, 2002,『クレオールのかたち』東京大学出版会
- Forner, N. Rumbaut, R., and Gold, S. eds., 1999, *Immigration Research for A New Century*, Russell Sage Foundation.
- 藤原法子, 2008,『トランスローカル・コミュニティ』ハーベスト社
- 藤原法子, 2011,「移民宿に見る都市横浜」『専修人間科学論集』Vol.1, No.2
- 樋口直人, 2010,「都市エスニシティ研究の再構築に向けて——都市社会学は何を見ないできたのか」『年報社会学論集』第23号
- Hirschman, C., Kasinitz, P., and Dewind, J. eds., 1999, *The Handbook of International Migration*. Russell Sage Foundation.
- 広田康生, 1992,「変貌する都心空間と伝統的居住者層のライフスタイル」『専修人文論集』No. 49
- 広田康生, 1997,『エスニシティと都市』有信堂
- 広田康生, 2002,「都市エスニシティ論再考」『日本都市社会学年報』20
- 広田康生, 2003a,「越境する知と都市エスノグラフィ編集——トランスナショナリズム論の展開と都市的世界」渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編著『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ』明石書店
- 広田康生, 2003b,『新版 エスニシティと都市』有信堂
- 広田康生, 2005,「同化研究の論理とトランスナショナリズム論——移動／incorporation／多様性のなかの統合」『専修人文論集』第76号
- 広田康生, 2006a,「政治理念としての共生をめぐる秩序構造研究への序論」奥田道大・松本康監修, 広田康生・町村敬志・田嶋淳子・渡戸一郎編『先端都市社会学の地平』ハーベスト社
- 広田康生, 2006b,「テーマ別研究動向(移民研究)」『社会学評論』57(3)
- 広田康生, 2006c,「トランスナショナリズムの展開がもたらす地域社会変容」岩崎信彦・似田貝香門・古城利明・矢澤澄子監修, 新原道信・広田康生編集『地域社会学講座 2 グローバリゼーション／ポストモダンと地域社会』東信堂
- 広田康生, 2008,「都市社会学はなぜエスニシティ研究をテーマ化したか——トランスナショナリズム論からの新たな展開」『日本都市社会学年報』26
- 広田康生, 2010a,「トランスナショナリズムと場所研究の現在の位相——差異と場所研究の見取図に関する覚書」『専修社会学』第22号
- 広田康生, 2010b,「トランスナショナリズムと場所の政治」『専修人文論集』第86号
- 広田康生, 2010c,『新版 キーワード地域社会学』ハーベスト社
- 広田康生, 2010d,「地域社会の多文化・多民族化」渡戸一郎・井沢泰樹編『多民族化社会・日本』明石書店
- 広田康生, 2011,「『共生』論と初期シカゴ学派エスニシティ研究」『専修人間科学論集』(社会学篇) Vol. 1, No. 2
- Levitt, P. 2001, *The Transnational Villageres*. Berkeley: University of California Press.
- Levitt, P. and Khagram, S., 2008, “Constructing Transnational Studies” <Editor??> <Book title??> <Publisher??>
- Levitt, P. and Waters, M C. (eds.), 2002, *The Changing Face of Home*, New York: Russell Sage Foundation
- 町村敬志, 1994,『世界都市東京の構造転換』東京大学出版会
- Mahler, S., 1998, “Theoretical and Empirical Contributions Toward a Research Agenda for Transnationalism”, M. P. Smith and L. E. Guarnizo eds., *Transnationalism from Below*, New Brunswick, NJ: Transaction Publishers
- 中筋直哉, 2005,「分野別研究動向」『社会学評論』Vol. 56, No. 1
- 新原道信, 2006,「いくつものもうひとつの地域社会へ」古城利明監修, 新原道信・広田康生(編集チーフ)『地域社会学講座 グローバリゼーション／ポストモダンと地域社会』東信堂
- 奥田道大, 1983,『都市コミュニティの理論』東大出版会
- 奥田道大, 2002,『ホワイト「ストリート・コーナー・ソサエティ」を読む——都市エスノグラフィの新しい地平』ハーベスト社
- 奥田道大, 2004,『都市コミュニティの磁場』東大出版会
- 奥田道大, 2009,『人々にとって「都市的なもの」とは』ハーベスト社
- 奥田道大・田嶋淳子, 1991,『池袋のアジア系外国人』めこん
- 奥田道大・田嶋淳子, 1993,『新宿のアジア系外国人』めこん
- Persons, S., 1987, *Ethnic Studies at Chicago 1905-45*, University of Illinois Press Urbana and Chicago
- Portes, A., 1989, “Contemporary Immigration: Theoretical Perspectives on Its Determinants and Modes of Incorporation”, *I. M. R.*, Vol. 23, No. 3
- Smith, M. P., 2001, *Transnational Urbanism*, Malden, MA: Blackwell
- Smith, M. P. and Guarnizo, L. E. eds., 1999, *Transnationalism from Below*, New Brunswick, NJ: Transaction Publishers
- 田嶋淳子, 1998,『世界都市東京のアジア系移住者』学文社
- 田嶋淳子, 2000,『上海』時事通信社

- 田嶋淳子, 2010,『国際移住の社会学』明石書店
- 谷富夫, 2002,『民族関係における統合と分離』ミネルヴァ書房
- Ueda, R., 2002, “An Early Transnationalism? : The Japanese American Second Generation of Hawaii in the Interwar Years”, P. Levitt and M. C. Waters eds., *The Changing Face of Home*, New York : Russell and Sage Foundation.
- Vertovec, S. ed., 2009, *Transnationalism*, New York : Routledge
- 渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編著, 2003,『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ』明石書店
- Wieviorka, M. 2001, *La Difference*, Paris : Balland (=ミシェル・ヴィヴィオルカ著, 宮島喬・森千香子訳, 2009,『差異——アイデンティティと文化の政治学』法政大学出版社)